備える 3.11から 災前の策

第132回 映画に見る防災

危機管理 リアルに訴え

「自分の街 壊れたら…」

防災・危機管理ジャーナリスト
渡辺実氏

映画は現代を映す鏡だ。今夏封切られた大ヒット映画「シン・ゴジラ」（製作配給・東宝、脚本・総監督・庵野秀明、監督・特技監督・樋口真嗣）を見ると、日本政府が想定外の巨大災害にどのような対応をするかがよく分かる。防災の専門家の間でも「初動対応の現状が忠実に描かれている」と話題だ。福島第一原発事故を巡る首相官邸の動きを追った映画も公開された。二作品とも、徹底したリアリティーの追求が「自分の住む街が壊れたら」「住めなくなったら」との想像力を働かせる。スクリーンが訴える危機管理の問題点を、じっくり見ながら考えてみた。（塚田真裕）

海から現れたゴジラが鎌倉海浜公園（神奈川県）に上陸。逃げ惑う人々。ゴジラは建物を壊しながら進む。地響きで崩れる民家、倒壊する高層ビル…。まさに東日本大震災の地震と津波を思わせる場面だ。銀座、新橋、霞が関…。見慣れた東京の街並みが容赦なく壊されていく。

現実へのこだわりは、作品中の政府の災害対応にも見られる。想定外の「巨大不明生物」の出現に関係や官僚が集まり、どの法律を適用して対応できるかを議論。災害対策基本法を根拠に「巨大不明生物特設災害対策本部」が設置され、各省や有識者から人材が集められる。これがゴジラに立ち向かうチームだ。

また、人が住んでいる地域での自衛隊の武器使用の合法性を議論する場面もある。「会議のための会議か」との官僚のせりふが、重大な危機を前にしても、会議を重ねて法律を成立させなければ物事を進められないという、政府の危機管理の本質と限界をよく表している。

また、出演者は三百二十八人にも上る。登場する多くの人の所属省庁と肩書が紹介され、多種多様の政府関係者が防災に関わっていることが分かる。

「怪獣映画の一番面白いところは、現代社会に異物が最初に現れては。物を伝える手段としては最高だ。これまで「防災は専門書の棚にあること」との風潮があった。でも、伝わらなければ意味がない。これからは伝える側が知恵を絞らないといけない。

そこで、映画を含めたエンターテインメントは、伝える上で大きな武器だ。東京近郊で直下型地震に遭遇時に、帰宅困難者が直面するトラブルと解決法を主題とした漫画「彼女を守る51の方法」の原案をつくり、監修をした。漫画というサブカルチャーに防災を持ち込むことが狙いだった。書店では防災は専門書の棚にあることが多い。でも、若者は近寄りもしない。例えば漫画の棚にあって、初めて多くの人が手にしてくれる。

防災というのは、人の命に関わる重い問題。学者だけの閉じた世界で終わらせてはいけない。多くの人、特に災害時に一番力を発揮してもらう必要のある二十、三十代に関心をもってもらい、防災について考えてもらわなければいけない。伝えるセンスを持った人材の育成が急務だ。（談）

「備える」は毎月第一月曜日に掲載予定。次回は十一月七日です。

歴史に学ぶ ❸

「伊勢湾」の記憶つなぐ銅像

一九五九（昭和三十四）年九月二十六日、和歌山県潮岬に上陸した超大型の「伊勢湾台風」。愛知、三重両県を中心に五千人以上の死者・行方不明者を出した。

名古屋市南区は、高潮や堤防の決壊で大規模な浸水被害に遭い、千四百十七人が犠牲になった。当時工業高校だった大同大同高校（同区大同町二）は翌三十七日から職員、生徒が貯木場から流れ出た木々でいかだを作り、被災者の救出に出動。遺体の収容や避難所の運営にも当たった。当時の岸信介首相から「抜群の功績」として感謝状が贈られている。

その共助の精神と伊勢湾台風の記憶を後世に伝えるため、翌六〇年十二月に学校入り口に建てられたのが、銅像「愛と力の筏」だ。いかだに乗って救助活動に向かう生徒が棒でかじを取り、引き締まった表情で先を見つめている。台座の高さは、周辺の高潮位の三・〇七㍍。当時の災禍を忘れないために、定期的に男子ハンドボール部が掃除を生徒に説明している。同校は指定の避難所にはなっていないが、これまでも台風接近時などに、地域の人が避難してくることがあった。「いつでも避難所を運営できる心構えを」と生徒に説いている。

生徒たちの献身的な活動をモデルにした「愛と力の筏」

犠牲者の冥福を祈り、浜田南公園に建てられた「伊勢湾台風殉難者慰霊之碑」

南区には、伊勢湾台風の被害を伝える遺構が他にもある。高校から北東に二㌔。浜田南公園は住宅街の中にある小さな公園だ。犠牲者を悼む「伊勢湾台風殉難者慰霊之碑」のそばには、被害の概要をまとめた案内板がある。案内板には「惨禍を長く記録にとどめるため」、名古屋市の地図と浸水位が記されている。

入り口には、公園の由来が書かれたパネルもある。市と遺族が慰霊のために公園を造ったことや、水が引くと犠牲者のくつが流れ着いたことから、「くつ塚」とも呼ばれていることが記されている。名古屋港に近く、浸水被害が起こりやすい土地柄、「悲劇の記憶を忘れないとする、先人の意思が石碑から読み取れる。

（c）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています